

海外留学準備のための語学講座に関する調査

国際教育交流センター海外留学部門

村山かなえ

要旨

将来的に海外留学を考えている大学学部生、大学院生を対象に、留学準備として、TOEFL iBT[®] 対策講座を開講し、受講生に講座内容を振り返るための調査を行った。本稿では、その調査結果をまとめ考察を述べる。

本調査を行うことにより、正課外で日本の学生が海外留学に必要な英語運用能力を伸ばすためには、どのような学習機会を提供するのが効果的か、また、海外留学を考えている学生には、どういった講座形態が理想的か、などの点が主に検討すべき課題であることが明らかになった。そして、日本の大学が、海外留学志望の学生にどのように語学学習を促進できるか、今後議論の余地があることがわかった。

キーワード

海外留学, 英語教育, 留学準備, English for Academic Purposes

目次

1. 調査背景と目的
2. 調査概要
3. 調査結果
4. 考察

1. 調査背景と目的

日頃、海外留学を希望する大学学部生、大学院生からの留学に関する相談を受ける中で、語学対策に関する内容を相談する学生が年間を通じて多く目立つ。岩城・野水 (2010) が提起するように、大学として、海外留学志望の学生の語学力向上を支援する取り組みは

必要不可欠であり、近年その取り組み方法は模索され続けている。留学準備としての語学対策のみでなく、留学前と留学後に、包括した教育支援の仕組みを実践する例もあり (高濱・田中, 2011), 大学によって、海外留学を促進する取り組みは多様化しているとも言える。

名古屋大学では、2009年度入学生から、TOEFL ITP[®] を全員受験し、入学時点で、自身の英語運用能力を把握できる取り組みを行っている。また、Criterion[®] を使ったライティング能力向上のための指導など、日本人学生が苦手であるとされるアウトプットの技能を高める英語教育を全学で実施している。そのため、学生自身の自習のみによって、交換留学の語学要件を満たす学生も増加している一方で、何度も語学試験を受験しているものの、なかなか語学要件に届く結果が出ない学生もいる。そして、留学には関心があるものの、自身の言語運用能力に対して苦手意識が強い学生の存在も見逃すことができず (岩城・野水, 2010), これらの「あと一歩」で海外留学に手が届く学生層が、実際に海外留学を実現できるような留学準備の講座を運営する必要性があった。

よって、2013年度より、交換留学の語学要件のひとつである TOEFL iBT の準備を、週末を使って行う「Weekend TOEFL iBT 講座」を開始した。2014年度は、講座内容を拡大し、まだ TOEFL iBT を受験したことのない学生を対象とした入門クラスと、すでに TOEFL iBT を受験し、短期間でより効果的に点数アップを目指す応用クラスの2種類を、春学期、秋学期の両方で開講した。開講にあたり、本講座は、広く全学の学生に向けて海外留学のための準備を行う支援としての位置付けとした。そのため、受講条件を厳密にせず、海外留学を検討している学生であれば、受講可能とした。また、受講後に TOEFL iBT ほか、海外留学に必要な言語運用能力試験の受験を必須とせず、あくまで、海外留学のための語学学習の機会を大学と

して設けることを目的とした。

各クラスの講座受講生には、講座終了時にアンケートを実施し、講座内容の振り返りを中心に設問を設け、回答してもらった。回答内容は、次学期の講座の開講方針に反映できるようにした。両クラスのアンケート結果のうち、特に入門クラスについては、海外留学を実現する第一歩としての初歩的な位置付けであるため、海外留学への裾野を広げるためには、入門クラスの受講者が回答したアンケート結果を慎重に分析する必要があった。入門クラスのアンケート結果が、「あと一歩」で海外留学実現に向けて動き出せる学生層の考えであると理解できたため、大学全体として留学準備講座を運営していく上での参考資料として、本調査を行った。

2. 調査概要

2014年度の「Weekend TOEFL iBT 講座」入門クラスの受講生を対象に、講座内容に関する質問を中心としたウェブ上で回答するアンケートを実施した。春学期受講者総数59名のうち29名、秋学期受講者総数23名のうち12名の回答が得られた。講座全体の感想に関する設問のうち、本講座の開講方針を決定する際に重要となる、次の3項目に焦点をあてて分析を行った。

2. 1 講座授業外の自習について

入門クラスの授業は、春学期は週2回（平日1日と土曜日）の全10回、秋学期は週1回土曜日の全10回の授業が実施された。授業は、主に受講者のアウトプット技能を高める目的で構成され、スピーキング、ライティングを中心に、リスニング、リーディングもカバーする内容で行われた。また、受講生には、授業内容の復習と、次回の授業に関する予習を兼ねた宿題が課された。本アンケートでは、授業外でどのくらい時間を割いて本講座の準備を行っているか、また、各受講者が本講座を受けて、自習をどの程度行っているかを調査した。

2. 2 講座受講後の予定について

本講座は、受講生の海外留学実現が目的で開講されているため、本アンケートに、講座受講後どのように海外留学の準備を行うかといった設問を含めることで、受講者へ海外留学への準備意識を促し、講座を受

講したことで海外留学へ向けてどのような意識もっているかを把握するための設問を設けた。

2. 3 語学運用能力についての考え

言語運用能力の4技能（スピーキング、ライティング、リーディング、リスニング）のうち、どの技能が海外留学で必要とされているか、また技能を伸ばしたいと考えているかを把握するための設問を設けた。これにより、海外留学を目指す学生が、自身の能力をどのように捉えているかといった現状を知るだけでなく、本講座のような留学準備講座を開講するにあたって、授業内容をどのように構成すれば、より学生の需要に応えることができるかを検討するために調査した。

3. 調査結果

3. 1 講座授業外の自習について

講座中に課された宿題を行った割合は、春学期では、回答数のほぼ半分にあたる13名が8割以上を行い、続いて9名が、6割から8割の宿題を行ったと回答した。秋学期では、8名が8割以上の宿題を行ったと回答し、回答数の7割近くが8割以上の宿題を行ったという結果になった。また、授業外の一週間あたりの英語学習量は、春学期では、1時間30分以内が最多の7名、次いで、1時間以内と2時間以内が同数（5名ずつ）であり、秋学期では、1時間30分以内と2時間以内がそれぞれ4名で最多であった。この結果から、春・秋学期ともに、受講者のうち一定数は、多くの宿題をこなし、1時間30分から2時間を平均時間として一週間のうちに、なんらかの形で英語の自習をおこなっていることがわかった。自習内容は、ポッドキャストなどのリスニングコンテンツを利用したリスニング練習、TOEFLでよく出題される単語の強化、ライティング練習などが主にあげられた。

3. 2 講座受講後の予定について

講座が終わってから、TOEFL iBTを受験すると回答したのは、春学期では回答数のほぼ半数にあたる13名、秋学期では9名であった。また、対照的に春学期では11名、秋学期でも2名が「わからない」と回答していた。秋学期のアンケートでは、回答理由を問うようにしたが、「自信がなく、英語力が向上したか実感が無い。」といった自身の英語能力に関する捉え方や、

費用面などを理由としていた。特に春学期の受講生の中で、本講座を受講するものの、TOEFL iBTを受験するかは決めかねている受講生が、半分近くいることがわかったことは、今後本講座を開講する際に継続して検討すべき課題となった。

3. 3 語学運用能力についての考え

勉強や、研究・仕事をする上で、4技能のうちどれが一番重要だと思うかという問いについて、春・秋学期ともに、7割以上の回答がスピーキングとなった。春学期では次いで6割の回答がリスニング、5割強の回答がリーディング、5割の回答はライティングであったのに対して、秋学期ではライティングとリスニングがそれぞれ3割強、リーディングが2割弱の回答であった。また、どの技能を一番伸ばしたいかという問いについては、春・秋学期ともに、9割前後の回答がスピーキングとなった。春学期では、次いでリスニングが6割弱、ライティングが3割弱で、リーディングが1割強の回答であったが、秋学期では、リスニングが2割半、リーディングが1割弱の回答となり、ライティングの回答はなかった。このことから、将来的に必要なと思う技能も、受講生が伸ばしたいと思う技能も、どちらもスピーキングであることが明確になった。また、リスニングもスピーキングに続いて回答が多かったため、スピーキングとリスニングを中心とした授業構成が、求められている結果となった。

4. 考察

本調査を実施し、明らかになったことは多くあった。その中でも、本講座運営をするにあたり開講方針を検討するために、受講者が本講座の授業時間外でどの程度の時間を自習に当てられるか、本講座を受講したことで、TOEFL iBTの受験につながり、海外留学の準備となるか、そして言語運用能力の4技能のうち、どの技能に焦点を当てることが受講者の需要につながりうるか、といった内容は、本調査によって、大変興味深く知ることができた。

まず、自習時間の確保については、授業内で宿題を課すことにより、自習の必要性を促し、受講者が何らかの形で自習を行う結果となったことは評価できる。ただし、各受講者が自身の自習時間の長さだけでなく、どのような自習内容を実践しているか、また、そ

の実践内容が自身の弱点補強になり、TOEFL iBTなどで点数に反映できているかは、本調査だけでは判断できない。海外留学実現のための準備として、広く全学対象に本講座が実施されており、なおかつ正課外での実施のため、受講生には本講座受講を通して自発的に動き出すことが求められている。よって、本講座での宿題を行うことだけでなく、各受講者がどのように自習の習慣を確立でき、自身に必要な自習内容を見つけ出して実践できるか、今後の講座開講では、工夫と検討が必要であることがわかった。

次に、本講座を受講後にTOEFL iBTを受験するという回答が全員ではなかったことから、その理由をより具体的に調査する必要があることが明らかになった。金銭面が大きな理由であれば、大学側が語学試験の受験料を補助する仕組みが効果的であろう。また、受講者自身が語学試験の受験を躊躇する理由が多岐に渡る場合、教員が個別相談に応じるなどして海外留学実現を後押しするシステムがさらに機能することが望ましい。正課外の講座で受講生の自発を促すことと、教員がどこまで受講生の指導に当たるかは、線引きが難しいが、少なくとも本講座を受講している学生は海外留学実現に向けて動き出しているのは明らかであるため、受講生が本講座を受講したことで、語学力だけでなく、海外留学準備も少なからず成果があったと理解できる構成を考えることも検討課題であり、海外留学実現につながる学生を増やす後押しができるであろう。

受講生が求める技能として、春・秋学期を通じ最も回答数の多かったスピーキングについては、講座内容に今後も反映することが重要であることが明確となった。合わせて、リスニングも取り入れた内容とするためには、授業構成は講師と受講生とのインタラクティブな形式が求められていると理解できた。そして、スピーキングとリスニングの実践を数多く経験できる授業内容であれば、本講座で提供する学習環境が明確化できるということもわかった。今後は、本講座を受講したことで何らかの学習成果が受講者自身で理解できるような取り組みを確立できるようにすることが望まれる。

最後に、本アンケートの最後の自由記述欄には、春・秋学期ともに率直な意見が述べられており、中には、大学院生からの回答が興味深かった。以下は、大学院生が回答したものの中からの抜粋である。

・スピーキングなどその場で考えねばならない課題に対しては苦手意識をもっていました。初級者コースということもあってか、負荷が高すぎず、あまり気負わずに気軽に参加できました。ただ、もう少しホームワークが出てよかったかと思います。また、もっと個別にフィードバックがなされるような授業であると、よりよいと思いました。英語の勉強の時間を確保するためのペースメーカーとしてもとても役に立ちましたし、いろいろな専攻の人が集まり、普段は知り合わない人とも話げできたことも楽しかったです。ぜひ後期にも（今後も）このような講座を開いてほしいです。

・listening が思ったよりできなくて、今回の講座で少しは聞けるようになったとおもった。7回目くらいから、先生の言うてることがかなり把握できるようになったと思う。みんなどんどん上達していくので、頑張らないと思った。

・平日の授業は大学院生にとっては、参加が難しいです。

・学部生が多かったのですが、院生で国際学会等でのコミュニケーションに切実に困っている人も多いので、そういう人用の対策講座があると嬉しいです。

本講座前後に寄せられた受講者の声として、これら大学院生からの意見で共通していたのは、正課として特にスピーキングとリスニングの技能向上のみを中心とした授業が学部生までで終わり、大学院生対象は見受けられないこと、そのため海外留学というよりも研

究活動で英語が必要となるため、本講座を受講して少しでも英語学習に時間を割くようにしたかったというものである。繰り返しになるが、本講座は海外留学を目指す学部学生、大学院生を対象としていた。しかし、本講座を募集した際には、上述のような研究活動上必要に迫られて英語の運用能力を総合的に向上させたいという大学院生からの問い合わせも窓口にならずに寄せられた。このことから、日本の大学院生の英語学習に関しても本講座運営にあたって考えさせられることとなった。ただし、このような大学院生の捉え方は、特に学部上回生の学生にも当てはまるとも考えられる。本講座を運営することは、海外留学についてだけでなく、語学学習に関すること、正課外の講座を運営すること、日本の大学現場で実施可能なことなど、多角的な面を考慮する視点に立ち、工夫を凝らして実施していく難しさと必要性を痛感できる。今後に向けて、本講座がどのように運営できるか、そのために、本調査が一助となることを切に願う。

参考文献

- 岩城奈巳・野水勉（2010）「名古屋大学生と海外留学－全学教養科目「現代世界と学生生活」課題レポートから見えてきたもの－」, 名古屋大学留学生センター紀要 第8号, pp.17-22.
- 高濱愛・田中共子（2011）「派遣留学生の教育的トータルサポートシステム構築へ向けて：日本人留学生を対象とした留学前および帰国後教育プログラムの試み」, ウェブマガジン「留学交流」, vol.4.